慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	前言語的世界の探究 : D.W.ウィニコットの「情緒的発達論」をめぐって
Sub Title	Exploration of the Pre-verbal World : On the theory of emotional development by D.W. Winnicott
Author	長尾, 真理(Nagao, Mari)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2005
Jtitle	哲學 No.113 (2005. 3) ,p.131- 164
JaLC DOI	
Abstract	The purpose of this paper is to examine the sociological possibilities of "the theory of emotional development" by Donald Winnicott (1896-1971). He was a pediatrician and in the mid-1980s he had an extensive supervisory experience with Melanie Klein. He was known as an original thinker and had an extraordinary unique imagination. Winnicott took the developmental theory back into the earliest infancy, the period of life from conception to three years of age, therefore his work was devoted to the verbal exploration of what is pre-verbal in the history of the individual. The work of Winnicott provided the balancing force in object relations theory which emphasizes the environmental context and the real qualities of the maternal object, and his concepts were related well to ego psychology and self psychology. Winnicott concerned himself with issues of dyadic interaction, that is infant-mother relationship, and was always aware of the contexts of the facilitating environment and the culture. But it was his consistent perspective on stages of development that the neonate's experience was global and undifferentiated. Nowadays his influence has gained steadily and his imagination contributes to the theory and practice of psychoanalysis and other studies.
Notes	投稿論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000113-0131

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

投稿論文

前言語的世界の探究

——D. W. ウィニコットの「情緒的発達論」をめぐって——

長　尾　真　理*

Exploration of the Pre-verbal World

——On the theory of emotional development by D. W. Winnicott——

Mari Nagao

The purpose of this paper is to examine the sociological possibilities of "the theory of emotional development" by Donald Winnicott (1896–1971). He was a pediatrician and in the mid-1930s he had an extensive supervisory experience with Melanie Klein. He was known as an original thinker and had an extraordinary unique imagination. Winnicott took the developmental theory back into the earliest infancy, the period of life from conception to three years of age, therefore his work was devoted to the verbal exploration of what is pre-verbal in the history of the individual.

The work of Winnicott provided the balancing force in object relations theory which emphasizes the environmental context and the real qualities of the maternal object, and his concepts were related well to ego psychology and self psychology. Winnicott concerned himself with issues of dyadic interaction, that is infant–mother relationship, and was always aware of the contexts of the facilitating environment and the culture. But it was his consistent perspective on stages of development that the neonate's experience was global and undifferentiated. Nowadays his influence has gained steadily and his imagination contributes to the theory and practice of psychoanalysis and other studies.

* 慶應義塾大学文学部人文人間関係系（社会学）

1. はじめに

子どもを取り巻く環境が大きく揺れ動いている．現在世界各地で頻発する武力紛争を背景として激動する地域での状態については言を俟たないとしても，多くの先進諸国では，また別の意味で子どもをめぐる予測しえない事態が相次いでいる．少子化対策が緊急の課題となった日本においても，「家庭内暴力」や虐待といった「家族環境」をめぐる問題をはじめとして，先端の情報機器を介した慢性的な「暴力」への接近やそこから導出される犯罪など，現代を象徴する様々な社会問題が子どもを巻き込みながら拡大している．子どもが「暴力」の被害者にも，あるいは「加害者」にもなりうる状況はすでに日常化しており，決定的な社会的対策を講じえないまま事態は深刻の度合いを増している．一方教育の領域に目を転じると，競争社会の原理は教育の現場に深く浸透し，対人関係を形成する重要な時期にその機会を逸したまま受験技術の習得ばかりが課せられていく．このように，現代の「不透明な社会状況」を反映した養育環境は，子どもをバランスの取れない「歪んだ」人格形成へと導く要因ともなりかねない．問題が起こるたびに「社会規範の強化」や「こころの教育」ばかりが強調される現在，こうした道徳律や教育への「過剰な期待」がまさに社会自体の不安や自信喪失を物語っているとも言えよう．

ところで子どもの養育の基点となる育児の領域においても，今日母親の「不安と自信喪失」はひとつの社会問題となっている．メディアからの情報に振り回され，自信を持って育児に取り組めなくなるケース．また少子化や核家族化を背景として，家族内での協力が得られないまま慣れない育児に孤立し，不安と焦燥感から抑うつ状態に陥るケース．また自分の子どもを愛することができず，育児放棄や虐待へと向かうケースも数多く報告されている．こうした生育に不適切な環境に子どもが長く放置されるならば，身体的・情緒的発達の障害を招くばかりではなく，成長後の人格形成

に対しても計り知れない影響を及ぼす.

そもそも育児とは，当事者たる親自身が過去に体験した自分と親との関係，すなわち自らの「養育環境」に基づいてその延長上に形作られる関係であり，その意味では妊娠・出産をも含めて基本的には母子間の「相互関係」として捉えることができる．すなわち育児とは，家族関係の過去と現在，そして現在と未来とを結ぶ，いわば「要」に当たる役割を担っているとも言えよう．ところで精神医学の領域において，この育児の中心となる母子関係に焦点を当て，その関係性の発達とそこから生じる様々な問題を対象として発展してきたのが，今日「乳幼児精神医学」と呼ばれる学際的な研究領域である．とりわけ最近では，電子医療機器の飛躍的な発達を背景とした研究が注目を集めており，それに伴い研究の中心も乳幼児期から新生児期へ，さらには出生前の胎児期へと移行している．しかし研究対象が発生過程の初期段階へといかに遡行したとしても，それらの研究課題に共通する基本的視座はあくまでも「子どもの理想的な養育環境の追求」にある．そしてその前提となるのは，「子どもの身体的・精神的発達はその養育環境との絶え間ない相互作用の中で達成される」，という基本的認識なのである．子どもをめぐる問題の背後には様々な要因によって引き起こされる「関係性障害」が潜んでいる．これらを社会的・文化的な多様性を考慮しつつ，また家族のあり方や母子関係にまで遡及しながら分析し，精神的病理のリスクを軽減し，また精神的葛藤が将来の可能性を損なうことのないよう早期に解決を図ること．これらが「乳幼児精神医学」に課せられた中心的課題である．

ところで，精神分析の領域において乳幼児の問題を今日ある形で最初に取り上げたのは，イギリスの精神分析家でありまた小児科医でもあるD. W. ウィニコット (Donald Woods Winnicott 1896-1971) であった．彼の理論の中核をなすのは「早期乳幼児期の発達理論」であり，したがって前言語的段階にある乳幼児を分析対象とすることから，乳幼児を「抱え

る」母親をも含めた「母子関係」を基本的な分析単位とすることにおいて独自の理論を展開していった．また彼の理論の更なる特質は，乳幼児による対象認識とそれに伴う主体の成立過程を発達段階の中で分析・解明することにおいて，自我の成立に関する発生論的研究としての意義を併せ持つところにある．最近では，フランクフルト学派の「批判理論」の立場からA. ホネット (Axel Honneth 1949–) が自らの「社会的承認論」を定式化する基礎理論としてウィニコットの発達論を援用しており，また精神分析家の T. H. オグデン (Thomas H. Ogden 1946–) は，「主体性の間主観的構成」の分析をウィニコット理論の中に読み込む作業を試みている．このように社会科学の領域からみても興味深いウィニコット理論であるが，本稿ではひとまずウィニコットの早期発達論に焦点を当て，社会科学的な視点から理論の成立背景とその展開とを整理していきたいと思う．一連の作業を通して，「こころ」の成立過程に関するひとつの仮説を明らかにすると共に，併せて早期発達過程における「母子関係」が子どもの人格形成にとってなぜ重要であるのか，その理由を明らかにしていきたいと思う．

2. 「対象関係論」の成立

19 世紀末のウィーンにおいてジグムント・フロイト (Sigmund Freud 1856–1939) によって創設された「精神分析」は，ナチズムの台頭に始まるユダヤ人迫害とその創始者フロイトの死を境として大きく二つの流れに分かれ，その後それぞれ独自の展開を遂げることとなった．このようにして成立するに至るフロイト以降の精神分析において，一方の中心は多くのユダヤ系精神分析家の移住・亡命先となったアメリカであり，他方の中心はフロイト自身がウィーンから逃れた亡命の地，イギリスであった．さてアメリカにおける展開は，フロイトの精神分析理論，中でも欲動論や〈自我－超自我－エス〉といった，心的構造論に基づく精神分析的自我心理学として発展を遂げていった．特に心的欲動を含め，あらゆる心的現象とそ

の機能とを身体＝脳の働きとして捉え，また精神的な発達を生物学的な脳の成熟の問題とみなすフロイトの生物主義的視点は，アメリカの精神医学に対して新たな方法論と理論的基盤とを提供することとなる．こうしてアメリカへ渡ったフロイトの精神分析は，その後精神医学の領域における「力動精神医学」の確立へと大きく道を拓くことになったのである．

ところで精神分析のもう一方の中心地となったイギリスでは，フロイトが亡命した当時（1938年）メラニー・クライン(Melanie Klein 1882–1960)と彼女の後継者たちがひとつの潮流（「クライン学派」あるいは「英国学派」）を形成していた．そしてクラインとフロイトの末娘であり後に彼の「象徴的」後継者となるアンナ・フロイト(Anna Freud 1895–1982)との間では，1920年代半ばから児童分析に関する論争が繰り広げられていた（1926–1948年）．こうした中，亡命中のフロイトがイギリスで精神分析活動を再開したこともあって，両者の論争はイギリスの精神分析学会を巻き込んでさらに激化することとなった．

現在ではともに児童分析の創始者とされるクラインとA.フロイトであるが，両者の理論的相違は，児童に対する精神分析の治療技法に関する問題として顕在化していた．A.フロイトは，精神分析を自我心理学の方向へと発展させた分析家の一人であったが，彼女は父親であるフロイトと同様に，心理生物学的な観点から外的な環境への適応能力が未発達である児童の特殊性を重視し，児童を精神分析療法の対象とする場合には家族面接を加えるなど治療面での配慮が必要であると強く主張した．これに対してクラインは，すでに1歳未満の乳幼児にも無意識的幻想といった本能に基づく心的世界が構築されていると主張し，成人に対するのと同様の治療方法を用いて幼児の心性を解明するための精神分析的接近を試みていた．早期の乳幼児に対するこのようなクラインの認識には，早い段階から乳幼児–母親関係の重要性に注目し，また教育分析を通してクラインが精神分析療法家になることを決定づけたハンガリー出身の分析家，フェレンツィ

(Sandor Ferenczi 1873–1933) からの影響がうかがわれる．ともあれクラインは乳幼児，それも出生直後の早期乳幼児の分析を通して，乳幼児の心的形成過程すなわち自我の発達過程の解明を大きく前進させることとなった．このように，クラインは乳幼児の心的世界の探求と治療的実践をめざす早期分析の端緒を開いただけにとどまらず，様々な成人の精神疾患の研究や数多くの臨床的治療活動を通して，フロイト以降の精神分析の展開に一つの方向性を与えることとなった[1]．また，クラインの下には多くの精神分析家志望者が集まっていたが，クラインは彼らに対しても多くの教育分析を行っている．このようにしてクラインの影響を受けた分析家の中からは，先のイギリス精神分析学会を巻き込んだ「対立をめぐる論議」に加わることなく，したがって「クライン学派」にも「フロイト派」にも属さない中立的立場を採る人々が現れた．彼らは「中間派」あるいは「独立派」と呼ばれ，フェアバーン (William Ronald Dodds Fairbairn 1889–1964)，ガントリップ (Harry Guntrip 1902–1975)，そしてウィニコット等，独創的な分析家がここに含まれている．彼らは後に，その独自の臨床的実践と理論的展開を通して，精神分析における「対象関係論学派」あるいは「イギリス対象関係論学派」と呼ばれる大きな潮流の基礎を築くことになったのである．

3. 「対象関係論」の特質

さて，精神分析の創始者フロイトは，19 世紀の進化論や唯物論的生物学を自らの思想的背景として，脳神経学の医師・研究者としての職業生活を開始した．こうした医学的・生物学的視座は，彼の精神分析理論とりわけリビドーの発達論などにも色濃く反映している．その後父親の死を契機としたフロイト自らの自己分析を通して，エディプス・コンプレックスの概念に代表される主観的な「心的現実性」に着目するようになる．また精神療法家としての治療実践は，フロイトに対して分析的関係における「転

移 transference」や「逆転移 countertransference」[2] といった，治療者と患者との間の臨床的な相互関係の問題へと目を向けさせる契機ともなった．「転移」とは，エディプス・コンプレックスを通過することを通して幼児期(3歳から5歳位まで)に形成された患者の無意識の欲望が，治療の過程で分析家自身へと投影される心的現象を指している．フロイトは，この「転移」を分析・解釈し解決する過程こそが，精神分析療法の中枢部を形作ると考えていた．したがって先にも指摘したとおり，エディプス・コンプレックスを通過していない3歳以下の乳幼児の心には以上の意味での内的世界が存在せず，したがって「転移」も起こらないために精神分析の対象とはなりえない．以上が幼児を対象とした精神分析に関するフロイトの考えであった．ここには，脳神経学的な観点から意識過程を脳の活動過程へと還元し，また精神分析をあくまでも言語的洞察や解釈による分析活動として限定しようとするフロイトの姿勢がうかがわれる．フロイトは死の直前まで精神療法家として分析活動を続けたが，この心理生物学的な理論構成と科学的な臨床態度とは終始一貫して変わることがなかった．分析家は患者との関係において常に科学的な中立性と客観性とを持って臨むこと．これが精神療法家フロイトの変わらぬ主張であった．

さて以上のような特徴を持つフロイトの精神分析理論に対して，フロイト以降の精神分析，とりわけ「対象関係論 object relations theory」は，心的機能一般を他者との関係に基づく諸要素を内面化する過程で生じる心的メカニズムの総体とみなし，フロイトが退けた先の二つの問題，すなわちエディプス・コンプレックス以前の乳幼児の心的世界の解明と，治療関係における分析者と患者との相互性を重視する方向へと精神分析理論を展開する原動力となった．そのなかにあって，早期の母子関係に着目し乳幼児の認知的な発達を「環境としての母親 environment-mother」との対象関係の中に探ろうとしたのが，臨床的分析家でありまた小児科医でもあったウィニコットである．

4. ウィニコットと乳幼児の世界

ウィニコットの精神分析理論を特徴づけているのは，彼の小児科医としての豊富な臨床経験であった．平易な言葉で展開される彼の理論には，深い臨床的洞察が込められている．そして，そのことがウィニコット理論の曖昧さやある種のわかりにくさの原因となっていることもまた事実である．しかし，それは同時にウィニコットの理論を解く鍵でもあり，また彼の人間観や世界観ともつながっている．ウィニコットはケンブリッジ大学を卒業後，1923年に小児科医として活動を開始しているが，それと相前後して教育分析を受け始め，精神分析家としての資格を取得した．その後，クラインによる乳幼児期の心的分析理論に触発されたウィニコットは，クライン自身からも臨床的な分析指導を受けるなど（1935-1941年），その後の精神分析理論の展開において決定的な影響を受けることとなった．当時クラインは，幼児の心的発達の最早期に母親との関係を通して形成される幼児期の「抑うつ性不安」に関する研究を続けており，これを「抑うつ的態勢 depressive positions」という概念を通して展開し始めた時期であった．ところでクライン理論の意義のひとつは，それまでの精神分析理論がフロイトのエディプス・コンプレックス概念に代表されるように，父親を中心とした子どもと母親との「三者関係」に基づいて構築されていたのに対して，これを母親と幼児との「二者関係」，すなわち「母親-乳幼児ダイアド mother-infant dyad」と名づけられた相互行為の問題へと転換したところにある．この転換は社会科学的観点からは特に興味深いものであろう．というのもこのことはすなわち，精神分析とダイアディック・モデルを社会関係の基盤に据える社会科学との間に共通の理論的素地が形作られたことを意味しているからである．

しかしながら小児科医であるウィニコットにとって，母親から切り離された心理的実体としての乳幼児の存在を前提とするクラインの理論は，乳

幼児と母親との特異な関係を分析・研究するためにはなお不完全であると思われた．なぜならば，ウィニコットにとってそもそも「実体としての幼児」というものは存在しえないからである．小児科医としての臨床的経験に依拠する限り「幼児がいるところには必ず［母親による］育児がある」し，また「［母親による］育児のないところには幼児も存在しない」からである．つまり幼児と母親とは，育児という関係において常に「ひとつの単位」を形成している，という認識である．母親の育児機能に注目するウィニコットにとっては，この相即不離のいわば共同空間を形成する母子関係こそが，幼児の情緒的発達すなわち自我発達の唯一の単位でありまた母胎でもある，と考えたのであった (Winnicott 1960a=1977)．それでは次に，ウィニコットの「情緒発達論」に基づいて母親との関係を中心とした幼児の発達過程，すなわち母親からの自我支持とそこからの精神的離脱を含む自我の確立過程を概観していくことにしよう．ここにおける最初の鍵概念は「依存 dependence」である．

5. 自我の発達と母親の役割

ウィニコットは「幼児 infant」の語源が「話さないもの」であることを示しながら，言語の習得以前の早期乳幼児期の育児が「母性的共感」に基づいていることを指摘する．本来，幼児は等しく生得的な潜在能力を持っているが，その潜在能力が適切に分化し顕在化しうるか否かは，母親の育児のあり方いかんにかかっている．そして何よりも母親の育児機能の中心となるのは，幼児の自我を支持あるいは補強し，それを安定化させるところにある．このように考えるウィニコットは，しかし母親に対して特殊な育児方法を求めているわけではない．ウィニコットが重視するのは，一時期乳幼児と共に過ごしその世話に没頭することができる普通の，そして自然な育児形態であり，またそれが可能な「母親」という存在なのである．ウィニコットはこうした育児の主体となる普通の母親を「ほぼ良い母

親 good enough mother」という言葉で表現している．そこには，「普通」であることに内在する普遍性やその根源的意義を見抜くウィニコットの臨床的な洞察力がうかがわれる．

(1) 絶対的依存段階

ところで自我発達の出発点は，果たしていつ頃まで遡ることができるのだろうか．ウィニコットはこれを，母親の妊娠最終期から生後 2, 3 ヶ月の間という極めて早い時期に設定する．とりわけ母親の胎内から外的世界へと移行したこの時期の乳幼児（一般には「新生児」[3] と呼ばれる）は生理学的にみてもまだあらゆる機能が未成熟の状態にある．つまり，新生児は出生後もしばらくは母親と未分化のまま融合し，いわば同一化していなければ生存することができない存在なのである．

> 幼児にみられるひとつの重要な情緒発達は，同一化という項目のなかに分類されるものである．極めて早い時期に，幼児は母親と同一化する能力をみせることができる (Winnicott 1963b: 90=1977: 103).

ウィニコットが指摘した，幼児と母親とが「ひとつの単位」を形作る時期である．母親は育児に専念しそれが母親の生活のすべてとなる．ウィニコットはこうした状態を「母親の原初的没頭 primary maternal preoccupation」と呼ぶ．この時期の母親は，乳幼児の生存のための欲求をあたかも自分自身の欲求であるかのように感知し，それを過不足なく満たすことができる．言い換えれば，母親は乳幼児がいかなる欲求も感じないほどに，乳幼児に共感をもって適応することができる，ということである．生後間もない未分化の状態にある乳幼児の自我を全面的に支えることができるのは，このように乳幼児と情緒的に一体化し，身体的にも心理的にも成

熟するために必要な唯一の「環境」を提供しうる，ウィニコットによって「ほぼ良い」と名づけられた普通の母親なのである．

ところで，絶対的な依存段階で形成される母親-乳幼児間の「環境」を象徴するのが，「抱きかかえること holding」という用語であろう．これはウィニコット理論のなかでも重要な位置を占める用語の一つであるが，これが意味しているのは実際に幼児を「抱きかかえる」という行為だけではない．「抱きかかえること」とは，自我発達の最早期において母親とまだ母親への依存状態にある乳幼児との間で形成され，乳幼児の生物学的-心理的成熟を可能にする，いわば「発育促進的な環境」を象徴する言葉である．それは，また乳幼児自らが母親によって肯定的かつ全面的に受け容れられたという原初的体験が可能となる，唯一の「環境」でもある．乳幼児期の「抱え（られ）る環境」の中で，母親の肯定的対応によってあらゆる本能的な要求を満たされた体験は，乳幼児自身にある種の万能感をもたらすことになるが，ウィニコットは自我発達の最早期におけるこの「万能感の体験 experience of omnipotence」こそが，後に独立し安定した自我を確立し，またそれを維持するうえでの重要な基盤である，と考えていた．というのも，「母親の原初的没頭」によって作り出された「自我を支える環境」は，そのまま成長と共に乳幼児自身の自我の中に取り入れられ，肯定的な自己認識の基盤として人格の中に統合されていくからである．このようにして生後間もない時期に体験される「抱え（られ）る環境」は，その後の母親との「分離」の経験にも耐え，またいかなる状況にあっても安定した自我を保ち健全な発達を支える重要な心的基盤を提供していくのである[4)]．

以上で概観したように，ウィニコットは自我発達の最早期において，母親と乳幼児とがまさに「ひとつの単位」を形成している，と考えていた．したがって身体的にも心理的にも母親と融合し未分化の状態にある乳幼児は，育児を担う母親との「自我支持」的な相互過程から次第に自らを引き

離すことにおいて，母親とは異なる人格を持つ別の主体としての自我を確立していくのである．そしてこの一連の過程こそが，ウィニコット理論における乳幼児の情緒的発達に他ならない．このように，ウィニコットの発達論では，その発端において母親という自立した主体の存在が不可避的に前提されていることがわかる．そもそも母親の存在なくしては，乳幼児のいかなる発達も起こりえない．つまり，クラインが想定したような「心理的実体としての乳幼児」が存在するのではなく，まさに「ひとつの新しい心理的実体が母親と乳幼児（になりつつあるもの）とによって創造されて」(Ogden 1986: 180=1996: 144) いくのである．そしてそのことを可能にするのが，母子間に形成された「抱きかかえる環境」なのである[5]．

(2) 相対的依存段階

1) 鏡としての母親の役割

一般に，生後間もない新生児でも目の前にある顔の表情に反応することが知られている．しかし大脳や眼球構造の発達等を考慮に入れると，実際に乳幼児の視力が安定するのは生後6ヶ月頃とみられている．その頃になると顔の表情を観る経験も蓄積され，様々な表情を区別することができるようになる．このようにして乳幼児の心的世界は一挙に拡がっていく．ウィニコットもまた乳幼児の情緒的発達や人格の統合といった観点から，生後5ヶ月から6ヶ月の間にひとつの重要な移行段階があると考えている (Winnicott 1945=1989: 191–210)．自我発達の観点からみると，視力の安定化がもたらす最大の貢献は乳幼児と「対象」との出会いであろう．それまで触れることはできてもなお乳幼児にとって未分化のままであった対象は，「見る」という行為を通して次第に客観的に知覚される「対象」へと分離していく．このようにして最初に現れる対象は，いうまでもなく乳幼児が日常的にまなざしを向ける「母親の顔」である．しかしこの段階では，対象（=「母親の顔」）はまだ完全に乳幼児自身の「外」に存在して

いるわけではない．つまり，これまで「抱える環境」において乳幼児と共に「ひとつの単位」をなしていた母親の存在は，すぐさま環境から分離された外在的な対象として認識されるわけではない．それはなお乳幼児自身の延長上に位置づけられ，乳幼児の抱く「万能感」のもとで乳幼児の「主観」が投影されたかたちで現れる「対象」である．以上の特質をもって乳幼児期の最も早い段階で分離する「対象」を，ウィニコットは「主観的対象 subjective object」と名づけている．

ところで，最初の「主観的対象」となる「母親の顔」は，乳幼児にとって特別な役割を担う「対象」でもある．ウィニコットはこれを「鏡の役割」とみなした．

> 個人の情緒的発達において，鏡の先駆は母親の顔である…赤ん坊は，母親の顔にまなざしを向けている時，一体何を見ているのか．赤ん坊が見ているのは，通常自分自身であると思う．別の言い方をすれば，母親が赤ん坊にまなざしを向けている時，母親の様子は，母親がそこに見るもの［＝赤ん坊］と対応している (Winnicott 1967b=1979: 156-158).

乳幼児は，「母親がそこに見ている」自分自身を見ている．つまり「母親の顔」に反映した，母親にとっての対象である「自分 Me」を見ているのである．「母親の顔」は乳幼児に対して「自己を反射させる give back」鏡の役割を果たしている (Winnicott 1967b=1979: 166). 同じく視覚像に注目したフランスの精神分析家ラカン (Jacques Lacan 1901-1981) は，「鏡像段階論」（1949 年）において幼児が鏡の中で自己の統一像を実現する過程を分析したが，ウィニコットは更に自我の発達段階を遡り，乳幼児が母親の顔の中に自らの「存在」を映し出す，自己認識の端緒として捉えたのであった．ここには，他者との関係性のうちに自己への規定を見出

す，というまさにその意味において，発達段階における「反省的自我」の萌芽を認めることができるだろう．しかし，ほどなく乳幼児はそこに見えるものが自分自身ではなく「母親の顔」であることを認識していく．「自分 Me」から「自分でないもの not Me」，すなわち外在的な対象が分離していく過程である (Winnicott 1963b: 91=1977: 104)．このことは同時に，対象を認識する「主体」の確立が間近いことを示している．

こうして他の諸機能の成熟，発達に伴い視覚それ自体の意義は次第に薄れ，代わって「統覚」[6] が重要な役割を担うようになる．以前は視覚，聴覚，触覚等のように感覚的にそれぞれ個別に与えられるに過ぎなかった情報は明確に意識化され，更にそれらを一連の脈絡の中で自覚的に統合する能力を獲得していく．更にはこの「統覚」を得る過程で，乳幼児は自分の振る舞いが「母親の顔」をどのように変化させていくかに気づくようになる．自分の振る舞いが引き起こす「何らかの意味」を，「母親の顔」の中に見出していくのである．これらの経験は日々の急速な成長を通して蓄積され，これを基に乳幼児は「母親の顔」の変化を予測することまで可能となるのである．以上で概観してきたように，ウィニコットが明らかにした前言語的段階にある乳幼児による意味理解の過程，つまり母親との関係性をとおして一定の行為の意味が生成・蓄積されていく過程は，社会的行為の存立基盤の構造を発達論の観点から解明しているという点で，社会科学的にみても極めて興味深い理論となっている．更に社会学理論にひきつけて考えるならば，それは乳幼児の自我が「対象としての自己」=me と「認識主体としての自己」=I とに分化・統合される過程とも関連している．それではこの自我統合や他者認識の成立といった問題に対して，ウィニコットはどのような分析を加え，またどのような結論を導いていくのだろうか．これらを明らかにするために，乳幼児から「主観的対象」が分離する段階に今一度立ち戻り，更に検討を進めていくことにしよう．

2) 移行対象の理論

乳幼児の発達過程は，母親の側からみるならば，絶対的依存段階での「乳幼児への原初的没頭」を経て次第に乳幼児への適応から離れ，母親自身が自らの独立を取り戻す過程でもある．

> ほぼ良い母親といえるのは，私がすでに述べたように，初めは幼児の欲求にほぼ完全に適応し，その後時間の経過に伴い母親の不在に対する幼児の能力が次第に増大するのに応じて，次第に適応の完全さを減らしていく母親のことである (Winnicott 1951=1979: 14).

このように徐々に母親と乳幼児との間に距離を置くことは，乳幼児の自発的な発達を促すうえでも大切な要件となる．ところで，乳幼児にとって「対象」の分離が始まる生後6ヶ月前後は，ちょうど「離乳」が始まる時期でもある．このことを考え合わせるならば，乳幼児にとって自分自身の延長上にある「主観的対象」を象徴する存在は，何といっても母親の乳房ということになるだろう．母親が乳幼児の欲求にほぼ全面的に適応している段階では，「母親は実際の乳房を，幼児が創り出そうとするちょうどその場所に，そしてその瞬間に据える」ために，乳幼児は「母親の乳房」をあたかも自分自身の一部であるかのような「錯覚 illusion」によって捉えている．こうした「錯覚」によって成り立つ乳幼児の「万能感」は，母親の乳房を自分自身から分離しながらも，なお自らが作り出し，またそれを使用することができると感じられる「主観的対象」として捉えているのである．この段階での「母親の乳房」はまさに「幼児の魔術的統制下」に置かれている．しかし離乳期に至って，母親は次第に乳幼児から身を引いていく．ウィニコットによるならば，「母親の最終的課題は，幼児を徐々に錯覚から解き放つこと」(Winnicott 1951=1979: 15) なのである．乳幼児はこのように自らが創り出した「錯覚」から解き放たれること，すなわち「脱錯覚 disillusionment」によって，初めて対象の「外在性」を認識す

ることができるわけだが，ウィニコットはこの「錯覚」から「脱錯覚」に至る移行過程，とりわけ生後4ヶ月から12ヶ月位までの間の乳幼児による対象認識の変化に注目する．

ところで，この移行期に乳幼児が出会う最初の所有物は，やわらかい玩具や人形といった，感触としては「母親の乳房」を連想させる対象となる．それらは対象認識という観点からみるならば，乳幼児の「万能感」による創造の産物，つまり「錯覚」による産物であるのと同時に，乳幼児にとって最初の「自分でない所有物」つまり外在的で「現実に属するもの」として現れている．ウィニコットはこれを，乳幼児にとって現実の受容に至る対象認識の移行過程で現れた対象であることから，「移行対象 transitional object」と名づける．

主観的な対象世界から客観的認知が可能となる段階への移行期において，この「移行対象」は乳幼児にとって失われつつある「母親の乳房」の代償である．しかしまだこの時点では，乳幼児はこの対象について，自らの「錯覚」によって創り出した「内的世界」に属するものなのか，あるいは「脱錯覚」によって対象化された「外的世界」に属するものなのかを明確に区別することはできないし，また明確に区別することを求められることもない．このように，現実認識をいわば留保された「移行対象」との関係は，乳幼児の想像力や創造性を育む貴重な体験の場ともなる．ウィニコットはこうしたいわば「中間領域」の体験が，乳幼児が構築していく「こころ」のあり方，つまり「心的現実」の発達や更には成人後の心的活動にも大きな影響を及ぼすと考えている．

> 内的現実と外的（共有）現実のどちらに属するかを問い質されない，この体験の中間領域は，幼児の体験の大きな部分を占め，その後生涯を通じて，芸術，宗教，想像力に富んだ生活，創造的科学研究等に付随する集中的体験の中に保持されていく (Winnicott

1951=1979: 19).

ウィニコットは「内的世界」と「外的世界」が交わるこの領域に，次第に離れつつある母親と乳幼児とを結びつける「可能性にみちた空間 potential space」が存在すると考えていた．そこには「乳幼児の万能感と実在への統制力との合体に基づく様々な体験を享受できる」領域，すなわち「遊ぶこと playing」を可能にする時間的・空間的な場が拓かれている．「私には，遊ぶことは当然文化的体験に先立ち，実際その基礎を作るものと思えるのである」(Winnicott 1967a=1979: 150)．このように考えるウィニコットは，幼児期のみならず，人生のあらゆる段階において「遊ぶこと」の持つ意義を明らかにし，またそれを追究し続けた分析家でもあった．そこには，フロイト流の精神分析理論が幼児期の心的発達を性的な欲動に基づく本能の領域へと収束させようとしたのに対して，母親と乳幼児との分離過程に始まる「遊ぶこと」の中に人間の「こころ」の本質を求めようとしたウィニコットの独特な人間観が示されているのである[7]．

さてこのように，「離乳」とは単に「(母) 乳を与えるのを中止すること」を意味するだけではなく，それまで依存状態にあった母親との「分離」の経験を通して乳幼児の情緒的発達を促し，更には来るべき「主体」の確立へと橋渡しをする重要な役割を担っていることがわかる．またこの時期には，すでに母親以外の家族成員との日常的な関係も始まり，こうした乳幼児を取り巻く様々な環境の変化が更なる発達過程へ向けての重要な基盤となっていくのである．

(3) 人格統合の段階

1) 対象を使用する能力

2歳になる頃までには乳幼児にとって大きな課題であった「離乳」もおおむね完了し，すでに次の発達が始まっている．前段階では乳幼児の万能

感に基づく体験を通して「主観的対象」という形で存在していた対象は，次第に乳幼児の「万能的統制」の領域外へと移行していく．こうして対象は乳幼児の「錯覚」を脱して外的現実の一部として認識されるようになる．しかしウィニコットはこの対象の外在性が保障されるためには，乳幼児の対象認識という観点からみて更に越えるべき一連の過程があると考えていた．ウィニコットは次のように述べる．

> “主体［となるべき乳幼児］が対象と関係する”その後に，（対象が外的になるに従い）“主体［となるべき乳幼児］は対象を破壊する”．そして“対象は主体［となるべき乳幼児］による破壊から生き残る”(Winnicott 1968=1979: 126-127).

ここでの「対象の破壊」とは，もちろん対象それ自体を破壊することではなく，乳幼児の万能感によって創り出された「錯覚」としての「主観的対象」を破壊することである．更に重要な点は，この破壊にもかかわらず対象それ自体が依然として「生き残り」存在し続けることである．

順を追って整理していくと，まず「破壊」されるのは「主観的対象」であるが，それと同時に「主観的対象」に投影された乳幼児自身の「万能感」でもある．乳幼児は，自分自身の万能感を破壊することによって初めて自らを「錯覚」の世界から解き放つことができるのである．また乳幼児の万能感を破壊することは，更に対象それ自体を「錯覚」の世界から解き放つことでもある．こうして，「破壊から生き残った」対象は，自律性と固有性とを有する外側の世界=外的世界に存在する「客観的対象」として認識されるようになる．そして乳幼児はそれを自らが「使用することができる対象」として発見していくことになるのである．そして以上の過程は更に乳幼児の発達を決定付ける段階，すなわち自分とは異なる外在的対象としての「他者」の発見と，もう一つの「主体」でもあるその「他者」と

のコミュニケーション段階へとつながっていくのである．

ところで，乳幼児にとって最初の外在的対象として認知されるのは，言うまでもなく母親であろう．母親は乳幼児にとって最初の「他者」なのである．ウィニコットは，この段階に至って乳幼児にとって「他者」として立ち現れた母親を，成熟過程の初期段階にあって乳幼児と同一化した存在であった「環境としての母親」と区別して，「対象としての母親 object-mother」と名づけている．さて，この乳幼児にとって最初の客体となる「対象としての母親」の成立は，乳幼児が自らを同一化していた母親といういわば「代理的自我」からの分離を経て，統合された新たな自我が実現されたことを示唆している．つまり「他者」成立の延長上に，すなわち自分とは別の「主体」である母親を「他者」として認識し，同時に別の「主体」である「他者」としての母親によって「主体」として認識される過程を通して，乳幼児は自己意識を持つ自律した一つの「主体」として実現していくのである．ここに以前の乳幼児自身の万能感に基づくいわば「独我論的世界」を越えて，他者との相互性に基づく「対象関係」を形作る能力が拓かれていくのである．したがって「早期乳幼児の発達理論」に依拠する限り，「モナド的な自我」なるものはそもそも存在せず，自我を獲得したというその事実において，私達は既に相互主観的な存在であると考えられるのである．ところで，以上で概観したウィニコットによる自我の発達過程において更に興味深いのは，「対象の破壊」と結びついた乳幼児の情緒的発達の側面であろう．この問題を解明するために，次にウィニコットの言うところの「いかなる破壊に対しても生き残る」という事態が意味するところを検討することにしよう．

2) 「一人でいられる能力」

ウィニコットが客観的対象の成立にあたって前提とみなす乳幼児自身の「破壊」への欲求は，精神分析の領域では「破壊的欲動」と呼ばれ，一般的には攻撃性と結びついた，いわゆる「死の欲動」との関連で捉えられる

概念である．しかし，ウィニコットはこれを情緒的発達の観点から「外在性の質を創り出すための破壊欲動」として再規定する．これは，いわば「破壊」に含まれる肯定的価値を積極的に認めようとする立場である．

> 私が述べている対象の破壊には怒りは含まれない．むしろ対象が生き残る時点には喜びがあるといえる．この瞬間から，またはこの局面を起点として対象は空想の中で常に破壊されていく．この「常に破壊されていく」という特質が，生き残っている対象の現実性をありのままに感じさせ，その感覚の質を強め，そして対象恒常性を与えてくれるのである (Winnicott 1968=1979: 132).

「破壊」は本来乳幼児の「空想」の中で行われるものである．しかし，いうまでもなくこの時期に乳幼児の最も具体的な破壊的衝動にさらされるのは「母親の乳房」である．例えば，歯が生え始めた赤ん坊が母親の乳房を咬んだり傷つけたりすることは，実際日常的にも頻繁にみられる行動であろう．こうした乳幼児の「破壊的」行為に対して母親は極端に拒否したりしかったりしないこと，つまり「報復」を加えるのではなく，たとえどのような行為であれそれを受け容れることが重要だとウィニコットは指摘する．このことは，自我の独立段階に至っても，なお母親による「抱える環境」の意義が失われてはいないことを意味している．母親は乳幼児にとって「対象としての母親」であると同時に，常に自我を支える「環境としての母親」でもあり続ける．それは乳幼児の側から見るならば，自分のいかなる「攻撃」においてもそれを受け容れて，変わることのなく存在し続ける母親の姿である．

> 幼児が独立をかちとって内的な安定を持つに至っているとはいえ，環境からの供給は決定的に重要である．…環境としての母親には特

殊な機能がある．それは，いつも変わりなく彼女自身であり，自分の幼児に共感を持ち，幼児の自発的な身振りを受け容れてそれを喜ぶことができるように常に付き添ってやる，という機能である (Winnicott 1963a: 76=1977: 83-84).

ウィニコットはこれを乳幼児にとって母親への信頼が芽生える重要な基盤だと考えている．

ところで，このように乳幼児が自我の中に「環境としての母親」を内面化すること，すなわち意識的であれ無意識的であれ「環境としての母親」と共にあることは，実際に母親が不在の場合にも不安や混乱状態に陥ることなく状況に対処するための，重要な要件であると考えられる．ウィニコットはこれを「一人でいられる能力 capacity to be alone」と呼び，「情緒的発達の成熟度を示す重要な指標」とみている (Winnicott 1958=1977: 21-31). この「一人でいられる能力」とは，いわゆる「引きこもり」等の不安に起因する心的防衛の側面ではなく，乳幼児が自らの世界の中で安定し自律した心的状態を保つことができるか否かといった，いわば「一人でいること」の「陽性の側面」を指している．ウィニコットによるこの指摘は，乳幼児期だけに留まらず，本来人間が「一人でいること」において充足することができるその情緒的基盤は，単なる身体的発達やその過程での「しつけ」等によって形成されうるものではなく，乳幼児が母親と未分化の状態にある自我発達の最早期において，母親が乳幼児の自我をいかに過不足なく「抱きかかえる」ことができたか，という事実に依拠していることを示しているのである．

3) 「思いやり」を持つ能力

ところでウィニコットは，成熟過程で乳幼児が母親に向ける攻撃的で破壊的な衝動の中には，対象への「愛情と破壊」とが峻別できない原初的な形のまま含みこまれている，と考えた．愛情と破壊とが共存するこのアン

ビバレントな体験は，乳幼児にとって「母親の喪失」という漠然とした不安を生む原因でもある．クラインに倣って以上のように最早期の発達過程を捉えながらも，乳幼児と母親との信頼関係を重視するウィニコットは，この無意識の恐れも「母親は確実に自分に付き添い」いかなる状況が起きたとしても自分に「修復の機会」を与るに違いない，という確信によって払拭されると考えた．つまりどのような攻撃に対しても常に時間を越えて「生き残る母親」は，乳幼児に対して安心と同時に信頼感をもたらすのであり，これらの体験をとおして乳幼児は，母親が自分にとって必要不可欠な存在であることを認識するのである．ここに芽生えるのは母親に対する肯定的な感情であろう．ウィニコットはこれを「個人が（相手の）世話をしたり気を配ったり，あるいは（相手に）責任を感じて責任を持つ，といった事実と関係した」心的活動とみなし，「思いやり concern」[8] と名づけている．こうしたこころの動きを体験することは，同時に必要不可欠な存在である母親からどのような時にも受け容れられる自分自身も，またかけがえのない不可欠な存在であることを感じ取ることができる最初の体験ともなるだろう．したがって，「思いやり」を持つ能力とは「本質的に二者関係に属する情緒的発達」であって，相手を自分とは異なる独立した主体として認めることにおいて初めて生じる能力でもあることがわかる．このことは乳幼児が「母親の顔」と自分自身とを同一視した最早期の発達段階を経て，すでに自分と母親との安定した関係を，「他者」一般との関係へと投影できるまでに情緒的な発達を遂げたことを意味している．したがって，不安や恐怖が本質的に自己防衛的な本能に根ざしているのに対して，「思いやりを持つ能力」とは，健全な情緒的発達過程にある乳幼児の，他者へと向けられた「こころ」の萌芽とみることができるだろう．

さて，ウィニコットの発達論を以上のように整理してくると，母親と未分化のままであった自我発達の最早期から外在的な対象が分離するまでの一連の過程は，乳幼児の情緒的な発達にとっていかに大きな意味を持つか

が明らかとなる．乳幼児は母親との未分化な関係の中で現れる「主観的対象」すなわち自己の「内的対象」を空想のうちで「破壊」することを通して「内的現実 inner reality」の世界を発見するのであり，同時にその「主観的対象」が「破壊」を乗り越えて「生き残る」ことを通して，自己の内的世界とは異なる「外的現実 external reality」の世界を発見するのである．ウィニコットは更に続ける．

> 内側にあるものは，それが生得的か否かは別として，自己の一部であって投影されうるものである．外側にあるものは，これも生得的であるか否かは別として，自己の一部ではないのであって取り入れられうるものである．健康な場合，子どもが生きて体験を重ねるとき，[内的現実と外的現実との間で]絶え間ない交換が起こるため，外界は内界の潜在力によって豊かにされ，内界は外界に属するものによって豊かにされる．(Winnicott 1963c: 99=1977: 115-116)

言い換えるならば，健全な発達過程にある乳幼児の場合，「内的現実」と「外的現実」とを分化し二つの現実世界を同時に体験しうる発達段階にあるならば，そこにはすでに対象の「投影」や「取り入れ」[9] といった心的メカニズムが始動するための環境が整えられている，ということである．そこには明らかに「こころ」が存在している．ウィニコットはこれを「心的現実 psychic reality」と名づけた．もちろん内的世界や外的世界が分化したとはいえ，乳幼児の中で二つの現実世界はまだ不安定なまま，「引き戻し」や「抵抗」が続いている．しばらくは乳幼児の心的世界もこの状況を反映して不安定な状態に置かれるが，次第に強く明確な「こころ」の輪郭が形作られていくことになるのである．

ウィニコットが描き出す「母子関係」には，彼の臨床的経験に基づく理論的特質と，彼独自の人間観が反映している．分析医として様々な疾患を

持つ幼児を対象としながらも病態それ自体を分析の中心に据えるのではなく，あくまでも母親と乳幼児との関係に基づいた健全な自我機能の発達段階を尺度として，乳幼児の精神病理を系統的に解明しようとする姿勢である．心的機能の基盤を幼児期のエディプス・コンプレックスに求めたフロイトや，あるいは対象関係における不安とそれに対する防衛機能を重視したクライン等の理論を想起するならば，母親と乳幼児との自我支持的な関係を中心に据えたウィニコットの理論の特質は明らかであろう．そして以上のウィニコットによる発達理論の特質は，そのまま治療関係における分析者と患者との相互性や，患者を「抱きかかえる」臨床的環境を重視するウィニコットの立場へとつながっているのである．

(4) 自我の発達と母親の役割

ウィニコットに従い，自我発達の最早期における成熟過程を乳幼児と母親との関係に焦点を絞って検討してきた．乳幼児期の自我機能は母親が提供する環境への適応を通して発達する．言い換えるならば，発達の初期段階における乳幼児の成熟へ向けての生得的な潜在力の実現は，一人の乳幼児に気楽に根気よく没頭することができる母親の存在なくしては起こりえない，ということである．ウィニコットはこうした母親の機能の中に，時代や文明の違いを越え，また母親自身の資質の違いをも越えた普遍的な育児の意義を認めるのである．

> 当然人生早期での，知的理解を活用することのできる能力は幼児によって実にさまざまであり，…また遅れることもしばしばである．…育児の全過程はその主要な特徴として，幼児に世界を一貫したかたちで示してやるということがあるが，これはある特定の考え方に基づいて遂行されるとか，あるいは機械的に管理されるといったものではない．それは一貫して［母親として］彼女自身である一人の

> 人間による連続した管理があって初めて可能となるものである．ここでは完璧さは問題ではない．完璧さは機械にしかない．幼児が求めるものは彼が普通に得て然るべきもの，つまり［一人の母親が］彼女自身として存在し続けることによって［幼児に］もたらす［母親の］世話と注目にすぎない．これはもちろん父親の場合も同じである (Winnicott 1963b: 87–88=1977: 99).

誕生以後，母親が乳幼児の原初的期待や欲求を感知しそれに適切に対応することを通して形成される早期の生育環境は，その後の自我発達の母胎として乳幼児に大きな影響を及ぼす．いかなる理由であれ，母親が乳幼児の自我を支えるために不可欠な「適切な環境」の提供に失敗を繰り返すならば，母親によって満たされるはずの「万能感」も得られぬまま，乳幼児の不安は次第に高まっていく．乳幼児にとっては「想像を絶する不安」，とウィニコットが言い切るこの体験は，乳幼児の防衛的な心的メカニズムと結びついて自我の健全な発達を阻む一因となる．その際の防衛メカニズムの度合いにもよるが，環境との折り合いを付けて人格の統合を維持するために，乳幼児の自我は歪められたまま発達を続けざるをえないからである．このようにして形作られた自我を，ウィニコットは「偽りの自己 false self」と名づける．臨床的には一般に「いらだち」や摂食障害等の様々な機能障害として現れるが，更に重篤な場合には，環境である母親から押し付けられた欲求をあたかも自分自身の欲求であるかのように取り入れ，それによって自らが作り上げた「服従的な関係」を常態化してしまうことがある．ウィニコットが更に憂慮するのは，乳幼児自身が発達過程でその「服従的な関係」を内面化することを通して，そもそも乳幼児の欲求に適切に応えることのできなかった，まさに「その人物とそっくりに」乳幼児自身が成長していく場合である (Winnicott 1960b: 140–152=1977: 170–198). 以上の過程は，現在日本でも大きな社会問題となっているド

メスティック・バイオレンスや幼児虐待に関して，家族内で「世代間伝達」が繰り返される，その心的メカニズムに他ならない．

しかし乳幼児に対する不適切な環境が及ぼす影響は，以上で挙げた幼児期に現れるものだけにとどまらず，その後の発達過程においても同様に深刻な問題を引き起こす．たとえば精神分裂病に関しても，ウィニコットはやはり自我発達の最早期における母親からの愛情の欠如にその病因の一端を求めている．更に，青年期の自殺や非行といった「反社会的性向」に関しても，乳幼児期における「母性的養育の欠如」をその原因の一つに挙げている．

> 「反社会的性向」という用語は，…母性的養育の欠如 maternal deprivation に対する［子どもの］反応との関連を現している．…この性向は無益な脅迫行為となるが，そうなると子どもは非行のレッテルを貼られることになる．…しかしここで重要な点は，子どもの「反社会的性向」には剥奪外傷 deprivation trauma を癒そうとする［子どもの］(無意識的な) 希望が含まれている，ということである (Winnicott 1963d: 245–246=1977: 278).

適切な養育環境が維持されない場合，母親と乳幼児との間に形成されるべき連続的な自我支持的関係が中断することによって，両者の間には深い亀裂が生じる．これによって情緒的成熟は妨げられ，子どもは「痛々しい混乱状態」に陥る．しかし，不幸にしてそこから「反社会的性向」が現れたとしても，そこには他者に対してそのような形でしか表現することのできない子どもの切実な訴えや希望が託されている．ウィニコットの言う「無意識のうちに子どもに芽生える希望」とは，どこかに「この裂け目を埋める道があるかもしれないという希望」なのである．それゆえに，幼児期から青年期にかけての「反社会的性向」は，強力な抑圧的手段によって更生

されうるものではない，とウィニコットは繰り返し主張する．たとえそうした制裁措置が社会的な要請であったとしても，個人に対する一方的な管理や矯正によって問題が解決されるわけではない．重要なことは，彼らに対して家庭や学校で「発達促進的な環境を供給し続けること」であり，また模倣や服従ではなく「独自の自己表現の仕方」を習得させ，彼らに「創造のための機会を与えること」なのである．したがって道徳や社会的価値を習得させるための「教育」よりも，「愛と憎しみ」といったアンビバレントな要素を同時に含みながらも成熟過程を促進できる「環境」を提供することのほうが，子どもの情緒的発達にとってはるかに意義深いことだとウィニコットは結論づけるのである(Winnicott 1963c: 93-105=1977: 107-124).

人間の健全な精神の基盤は，乳幼児期に母親が提供する環境を母胎として形成される．母親は乳幼児との関係形成を通して乳幼児の依存的欲求に適応するだけではなく，更に乳幼児に対して依存から自律へと向かう機会をも提供する重要な役割を担っている．そして，ウィニコットが何よりも重要視するのは母親と乳幼児との間の信頼関係であり，その信頼関係に見合うかたちで芽生える乳幼児自身の他者への信頼感である．この母親と乳幼児との関係こそが，時代を超えて個人の様々な能力や可能性を導き出すための母胎，すなわちウィニコットの言うところの「可能性に満ちた空間」を形作るのである．母親と乳幼児との間にいわば相互主観的に生成されるこの共同的空間は，人生のあらゆる段階に対して拓かれた「遊ぶこと」を可能なものとする場，すなわち文化的体験を享受しまた創造性を育む場でもある．ウィニコットはこれを，「過去，現在，未来を結合し，つまり時間と空間とが圧縮された」領域であり，個人の「内的世界」や「外的世界」とも異なる「人間生活の第三領域」として位置づけている．しかし，ウィニコットはこの問題をこれ以上理論的に分析，展開することはなかった．彼の問題関心は，一貫して乳幼児と母親との相互関係へ，そして

乳幼児の臨床的分析治療へと向けられていた．その意味では，この乳幼児と向き合う臨床的な分析治療の場こそが，ウィニコット自身にとっての「可能性に満ちた空間」であり，また「遊ぶこと」の実践的領域だった，ともいえるだろう[10]．ウィニコットは晩年に行った『私たちの生きている場』(1967 年) と題した講演を，次のような言葉で締めくくっている．

> この可能性に満ちた空間は個人によって非常に多様である．そしてその基礎となるのは，自分から自分でないものを分離する危険な段階に，つまり自律的自己が確立される初期の段階に，十分時間をかけて体験される乳幼児の母親への信頼なのである (Winnicott 1967 a=1979: 155).

6. おわりに

ウィニコットは小児科医として子どもの分析的治療に当たる一方で，臨床医としての立場から様々な社会問題についても積極的に発言し続けた．私たちが「生きている場」は，過酷な状況や様々な困難にあふれており，私たちはともすれば生きている実感を見失いがちである．しかし，私たちが常に「遊び」の心を失わずに可能な限り想像力をめぐらせ，それぞれの多様な生き方を認めることができるならば，私たちは必ず自分自身の生きる意味を見出すことができるはずだ．ウィニコットはこのように主張したのであった．そしてその根拠となるのが，発達の最早期に形成される「可能性に満ちた空間」という情緒的発達の場であった．主体と客体，すなわち自己と他者とが形作られる場であり，また意味が生成し構造化されるこの空間は，同時に他者を受容する心的基盤でありその後の人生に大きな影響を及ぼす精神活動の土台でもある．しかも，それは誕生前後の一時期，乳幼児と母親との共同性によってのみ可能となる空間でもある．したがってウィニコットの情緒的発達論の中心的課題は，この母子間の共同的空間

の生成過程を明らかにすることに向けられていた，といっても過言ではないであろう．

ウィニコットの発達論を以上のように総括するならば，「ほぼ良い母親による養育環境」という理論設定の背後には，理念的な意味での「近代」的家族像が前提されていることは明らかであろう．すなわち，ウィニコットの理論は今なお達成されざる「近代」的理念の意義を，前言語的段階にある乳幼児の養育という観点から私たちに再提起しているともいえる．しかし変動の激しい現代社会にあって，こうした理念的な「近代家族」像がかつての役割を急速に失いつつあることも，また事実であろう．今日のように停滞を余儀なくされた時代において，最初にその影響を被るのは高齢者層であり，そして家庭に取り残された子どもたちである．しかしどのような時代にあっても，子ども，とりわけ発達の最早期にある乳幼児は，共に過ごし自分に「こころ」を向けてくれる「他者」の存在を求めている．そして何よりも，今後私たちの社会がどのような方向へと歩み出すかは，若い世代の人々が「他者」との差異をどのように認識し，そして本質的に自己とは異なる存在としての「他者」をいかにして受け容れることができるか，という点にかかっているともいえるだろう．したがってこうした観点に立つ限り，ウィニコットの理論の現代的意義は，今なお失われてはいないとみるべきであろう．

ウィニコットは，乳幼児の前言語的な世界を豊かな意味を含むダイナミックな世界として生き生きと描き出した分析家であった．彼の発達論は，前言語的段階にある最早期の発達過程を，モナド的な主体の生物学的，生理学的な機能分化に基づく単線的な発達過程として捉えるのではなく，相互主観的に構成されつつある空間におけるダイナミックな相互過程として捉え直すべきことを私たちに促している．これは，フロイトが脳神経学的な観点から，自らの分析対象を意識的であれ無意識的であれ言語媒介的な領域に限定したことによって捕らえ損ねた精神構造の一側面であ

り，また社会科学的諸理論が前言語的段階を不問に付したまま理論展開を図ったことによって見過ごしてきた領域でもある．したがって，今後社会科学の分野においても，ウィニコットが明らかにしてきた前言語的段階での情緒的発達過程の問題を再検討していくことは，決して無意味な作業ではないだろう．以上の残された課題については，再度稿を改めて検討することとしたい．

注

社会科学では，一般に「自己 self」と「自我 ego」とを区別し，自らを客体として対象化された存在として意識する場合を「自己」，行為主体として創造性や主体性の担い手としての存在を示す場合を「自我」としている．しかしこれらの厳密な概念区分は，生理学的にみてもあらゆる面で未分化の状態にある乳幼児の特徴を分析・解明する際には，適応することが困難である．また精神分析や精神医学の領域では，社会科学とは異なる訳語を当てた概念が，すでに定着しているケースもみられる．以上の理由により，本稿ではこれらの用語を「社会科学的な意味」での厳密な区別なく使用している．

1) クラインは，臨床的知識やすぐれた観察力に基づいて「投影同一化」や「取り入れ同一化」等といった今日の精神分析で一般に用いられている独特な臨床的用語を生み出した．また，乳幼児の早期発達過程を対象関係における「妄想-分裂的態勢」から「抑うつ的態勢」への移行として捉えたが，双方の「態勢 position」は完全に統合されるものではなく，対象関係における攻撃的衝動によって導かれているという意味で，成人後も持続的に発達の順行現象と逆行現象（＝退行）とが繰り返されるとみなした．このようにクラインの分析理論は，攻撃的欲求やそれに対する防衛等の心的メカニズムの問題を深く追究したところに大きな特徴がある．

2) 「転移」とは，分析的治療関係の中で患者が幼児期の人格構造へと退行した際に現れる，患者から分析者に向けられた無意識の感情の総体を指している．これに対して「逆転移」とは，分析者自身の側から患者への，とりわけ患者の「転移」に対する無意識的な反応を指す概念である．分析者に対して自然科学者としての客観的・中立的態度を求めたフロイトは，「逆転移」という現象を重視しておらず，したがって分析者に対する教育分析によって克服可能な問題とみていた．しかしフロイト以降の精神分析の流れの中で，分

析的関係を社会的な相互関係として捉えるのと並行して「逆転移」の問題が次第に注目を集めるようになった．こうした視座の転換に関して，「対象関係論」は大きく貢献したといえるだろう．

3) 乳幼児期とは，一般に妊娠中の胎児の段階から3歳までの期間を表す概念とされている．そのなかでも，特に誕生以前を胎生期，誕生から生後28日未満の時期は新生児期と名づけられている．現在では，発達論の起点は人間の誕生にではなく胎生期の，それもかなり早い段階に設定されるようになった(「胎児医学」といった臨床・研究領域の誕生はその象徴的な例であろう)．その背景には超音波電子スキャンをはじめとした先端医療機器の開発と画像情報処理能力の驚異的な発達，そしてそれらに支えられた神経生物学などの研究領域の発達が挙げられる．

4) このような発達の最早期における「自我支持」的な体験とそれに基づく安定した自己肯定的認識は，いかなる状況にあっても自己と他者との差異を認めそれを受け容れることができるという意味で，同時に自分とは異なる「他者の受容」を可能にする心的基盤でもある点に，注目する必要があるだろう．

5) 育児という点から見る限り，最近では欧米も含めて多くの国々で，母親と子どもとのスキンシップを重視する傾向にある．しかし，日本に比べると欧米諸国ではなお「抱きかかえること」に対する抵抗感が強いようである．頻繁に「抱きかかえること」を繰り返すならば「抱き癖」をつける結果となり，そうした「甘やかし」は結局子どもの自立を妨げる，というのがその理由である．とりわけ「添い寝」に関しては，夫婦のプライバシーを尊重する観点から，現在でも強い抵抗感が示されている．こうしてみると，「抱きかかえること」に抵抗感が少ないのは，日本を含めて東南アジア諸国やアフリカ諸国の「子育て」の伝統といえるのかもしれない．以上の点を考慮するならば，英国人であるウィニコットの主張は，我々が考える以上に彼独特の育児観なのであろう(育児に関する国際的比較については恒吉1997などを参照)．

6) 「統覚とは，世界との重要なやり取りの発端であり，自己が豊かになることと，視覚に捕われる事物の世界の意味の発見が交互に起こる二方向の過程である」(Winnicott 1967=1979: 158)．ここで示される「二方向の過程」とは，自我の発達に伴い「内的世界」が拡大していくのと連動して，意味によって満たされた「外的世界」がその対象領域を押し広げていく過程を意味している．

7) 「遊び」の中に，人間の自由な精神や創造性を生み出す根源的な意義を認めるウィニコットは，近代社会における「遊び」の問題を精神分析の領域で理

論的に展開したという意味において，ホイジンハ(Johan Huizinga 1872-1945)の「ホモ・ルーデンス homo ludens」やカイヨワ(Roger Caillois 1913-1978)の「遊びの理論」などの系譜に属する分析家とみることもできるだろう．

8) クラインの理論の中でウィニコットが最も重視しているのは「抑うつ的態勢」に関する分析であった．クラインは，母親に対する愛情と憎しみのアンビバレンスが喪失感や罪悪感を導き，それによって乳幼児は一過性ではあるが抑うつ的状態を体験するのだと考えた．クラインが明らかにした対象「破壊」とそれに伴う抑うつ的不安，そしてそれを解消するための「償い」という一連の発達過程に対して，ウィニコットは同様の発達過程において，愛情の対象を取り戻すために相手に対して向ける「思いやり」と「慈悲」という用語を対置したのであった．クラインの「罪-償い」という自己否定的なニュアンスを退け，「思いやり」や「慈悲」という自己肯定的でなおかつ他者志向的な用語を意識的に用いるところにも，母子関係への深い洞察力と共にウィニコットの人間観がうかがわれる．

9) 「投影 projection」とは，一般には自分が受け容れられない願望や衝動，欲求を外的対象に投影＝外在化し，自分ではなくその対象の願望や衝動，欲求であるかのように知覚することであり，自我の防衛的メカニズムのひとつとされている．しかし乳幼児期においては，母親との共生的関係を他者との関係一般にも素朴に当てはめようとする傾向があり，こちらの方が「投影」メカニズムの原初的形態だと考えられている．これに対して「取り入れ（同一化）introjective identification」とは，自我が外的対象の特質を(基本的には)良いものとして判断し，それを自我の内に取り入れて同一化することであり，クラインの発達過程では「抑うつ的態勢」において優勢になると考えられている．これらの心的メカニズムは年齢を問わず正常な状態においても病的な状態においても現れるが，特に乳幼児期の健全な自我発達過程では，「投影」や「取り入れ同一化」を経ることによって，自我や超自我が発達すると考えられている．

10) ウィニコットは，子どもとの臨床現場で「スクィッグル・ゲーム squiggle game」という治療技法を用いていた．これは「なぐり書き技法」とも呼ばれ，簡単な形から出発して治療者と患者とが自由なイメージに基づき交互に続きの形や線を描き加えていく，といった方法を取る．つまりこの技法の特徴は，「遊ぶこと」を通して子どもと治療者＝分析者との間に建設的な相互関係を築くことが可能となる点であり，同時にそのようにして描かれた絵の中に現れる子どものこころの問題を，子ども自身が発見できるように導くこ

とによって，治療的な意味を併せ持つところにある．自由な連想と，描くという行為がもたらす緊張の緩和や「自発的な運動性の開放」が，前意識的な問題を視覚化させるという意味で，この「なぐり書き技法」は子どもと同様に成人に対しても有効な分析的治療技法だと考えられている．

参考文献

引用に当たって，訳語・訳文は日本語訳書に必ずしも従っていない．また内容を明確にするために，引用者が[　]内に言葉を補った．尚，引用内の(　)による補足は原文に基づいている．

Ashbach C., 1987, *Object relations, the self, and the group*, London: Routledge & Kegan Paul Ltd.

Davis M. & Wallbridge D., 1981, *Boundary and Space*, New York: Brunner/Mazel, Publishers.

Honneth A., 1992, *Kamph um Anerkennung Zur moralischen Grammertik sozialer Konflikte*, Suhrkamp Verlag (=2003, 山本，直江訳『承認をめぐる闘争』法政大学出版局)

Jacobs M., 1995, *D. W. Winnicott*, London: SAGE Publications Ltd.

Ogden T. H., 1986, *The Matrix of the Mind*, Northvale, NJ: Jason Aronson (=1996, 藤山直樹訳『こころのマトリックス』岩崎学術出版社)

———, 1994, *Subject of Analysis* (=1996, 和田秀樹訳『「あいだ」の空間』新評論)

小此木啓吾，1985,『現代精神分析の基礎理論』弘文堂

小此木啓吾・小嶋謙四郎・渡辺久子編，『乳幼児精神医学の方法論』岩崎学術出版社

恒吉僚子・S. ブーコック，1997,『育児の国際比較　子どもと社会と親たち』NHK ブックス

渡辺久子，2000,『母子臨床と世代間伝達』金剛出版

Winnicott, D. W., 1945, "Primitive Emotional Development," in: *Through Paediatrics to Psycho-Analysis*, New York: Basic Books, 145–156 (=1989, 北山　修監訳「原初の情緒発達」『小児医学から児童分析へ』岩崎学術出版社)

———, 1951, "Transitional Objects and Transitional Phenomena," in: *Playing and Reality* (=*PR*), New York: Basic Books, 1–25 (=1979, 橋本雅雄訳「移行対象と移行現象」『遊ぶことと現実』岩崎学術出版社)

———, 1958, "The Capacity to be Alone,"in: *The Maturational Processes and*

the Facilitating Environment (=*MPFE*), New York: International Universities Press, 29–36 (=1977,「一人でいられる能力」『情緒発達の精神分析理論』岩崎学術出版社)

———, 1960a, "The theory of the parent-infant relationship," in: *MPFE*, 37–55 (=1977,「親と幼児の関係に関する理論」『情緒発達の精神分析理論』岩崎学術出版社)

———, 1960 b, "Ego Distortion in Terms of the True and False Self," in: *MPFE*, 140–152 (=1977,「本当の，および偽りの自己という観点からみた，自我の歪曲」『情緒的発達の精神分析理論』岩崎学術出版社)

———, 1962, "Ego Integration in Child Development," in: *MPFE*, 56–63 (=1977,「子どもの情緒発達における自我の統合」『情緒発達の精神分析理論』岩崎学術出版社)

———, 1963a, "The Development of the Capacity for Concern," in: *MPFE*, 73–82 (=1977,「思い遣りを持つ能力の発達」『情緒的発達の精神分析理論』岩崎学術出版社)

———, 1963 b, "From Dependence towards Independence in the Development of the Individual," in: *MPFE*, 83–92 (=1977,「個人の情緒的発達にみられる依存から独立への過程」『情緒的発達の精神分析理論』岩崎学術出版社)

———, 1963c, "Morals and Education," in: *MPFE*, 93–105 (=1977,「道徳と教育」『情緒的発達の精神分析理論』岩崎学術出版社)

———, 1963 d, "Hospital Care Supplementing Intensive Psychotherapy in Adolescence," in: *MPFE*, 242–248 (=1977,「青年期の積極的精神療法を補う病院管理」『情緒的発達の精神分析理論』岩崎学術出版社)

———, 1967a, "The Place where we Live," in: *PR*, 104–110 (=1979,「私たちの生きている場所」『遊ぶことと現実』岩崎学術出版社)

———, 1967 b, "Mirror-role of Mother and Family in Child Development," in : *PR*, 111–118 (=1979,「小児発達における母親と家族の鏡としての役割」『遊ぶことと現実』 岩崎学術出版社)

———, 1968, "The Use of an Object and Relation through cross Identifications," in: *PR*, 86–94 (=1979,「対象の使用と同一視を通して関係すること」『遊ぶことと現実』岩崎学術出版社)